

2022年11月13日（日）「惨めさを知る幸い」

ハイデルベルク信仰問答より

問3 あなたは、どこで、あなたの罪とその悲惨な結果を知っていますか。

答え 神の律法からです。

ローマ 7:14-25

わたしたちは、律法は靈的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである。わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。もし、自分の欲しい事をしていないとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる。そこで、この事をしていないのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。もし、欲しないことをしているとすれば、それをしていないのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。そこで、善をしようとする欲しているわたしに、悪がはいり込んでいるという法則があるのを見る。すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいますが、わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。このようにして、わたし自身は、心では神の律法に仕えているが、肉では罪の律法に仕えているのである。

こうして、多摩ニュータウンキリスト教会の皆様と共に礼拝を守り、講壇交換の恵みにあずかれることを、心から感謝いたします。緊迫した世の中になってまいりましたが、それだけに、一回一回与えられている礼拝の機会を当たり前と思わず、一期一会の時として大切にしたいと思っております。今日、この会堂で皆様にお出あいできる奇跡、これは私の人生の宝です。東京福音センターという団体の中で生まれ育ち、その一つの働きに召されたことを、誇りに思っています。多摩ニュータウンキリスト教会に来させていただき、御言葉のご奉仕ができるということは、私にとって格別の喜びであります。

さて、やや不規則ではありますが、講壇交換の機会を用いて、ハイデルベルク信仰問答から語らせていただいております。前回は問2を扱いましたので、今日は問3を見てまいりましょう。

問3 あなたは、どこで、あなたの罪とその悲惨な結果を知っていますか。

答え 神の律法からです。

問3は問2の内容を受けていまして、思い出していただきますと、そこでは「救いの道筋」が三つにまとめられていました。

- ①人間の罪と悲惨
- ②罪と悲惨からの解放
- ③解放されたことへの感謝

皆様は、どのようなきっかけで教会の門を叩かれたのでしょうか。私は子どもの頃、この教会の新来会者の方が一人また一人と与えられていくのを、不思議な気持ちで見えておりました。親父の難しい話をわざわざ聞きに来るのかなあ。それとも、英語教室が楽しいのかなあ。私は牧師になり、東伏見の教会で牧会をしてるなかで、これまで電話やメール、あるいは直接訪ねて来てくださった方々の多くは、心の拠り所を求めておられたり、金銭的な必要があったり、健康上の問題と戦っておられたり、様々でした。反対に、特に問題を感じながら生きているわけではないけれど、教会のイベントや活動を通して集われるようになった方も多くいらっしゃいます。クリスチャンホームで生まれ育った子どもの場合、生まれたときから教会生活が伴っておりますので、そこに居ること自体に何の違和感も疑いも抱かないかもしれません。その場合、救いのメッセージをずっと聞いてはいても魂の底まではなかなか届きにくい面もあります。私自身がそうでした。いずれにしても、聖書はすべての人に「悲惨」というものを教えようとしています。これは「罪」と呼んでもよいのですが、敢えて「悲惨」という表現を用いるとき、ここで言われていることの意味が捉えやすくなるでしょう。

「悲惨」と訳された言葉は、原文では「Elend (エーレント)」というドイツ語の単語で、「惨め、悲惨、哀れ、窮状、貧困、不幸」などと訳すことができます。この中でも「惨め」という表現は、なかなか共感を覚えやすい。「あなたは罪人です」と言われても何のことかピンとこないかもしれませんが、「惨め」と言われれば、誰にでも惨めになった経験はあるはずですから、比較的理解しやすい話になってくる。

私たちは、どんなときに「惨めさ」を感じるのでしょうか。私は自分の様々な経験を振り返ってみましたが、身近なところではピアノ演奏が思うようにいかなかったときの感覚が思い出されました。楽器をなさっている方なら共感していただけたと思いますが、せっかく練習を重ねてきても、心の備えが十分にできていなかったり、本番前や本番中に心乱されるハプニングが起きて集中力が吹っ飛んでしまったり、緊張して指が思うように動かなかったり、頭が真っ白になってしまったり……。演奏というものは繊細な営みでして、演奏者なら悔しい経験をされたことが少なからずあると思います。失敗した後は何とも惨めで悔しい気持ちになるものです。

しかし、楽器の演奏における「惨めさ」というものは、その人の存在を脅かすほど大きなものではありません。もっと根源的な「惨めさ」というものがある。今日は「自己統一の欠如」という表現を使いたいと思いますが、自分が本来生きたいように生きられない、自分が

語った通りに行動できない、そういったことを自覚するときの「惨めさ」です。一人の人間でありながら、場所が変わると別人のように振る舞ってしまうというケースがあります。家の内と外では性格が全然違っていたり、普段は穏やかなのに運転をすると豹変したり、相手によって態度がコロコロと変わってしまう人もいられるかもしれません。あるいは、見栄を張って嘘をつくこともこれに当たるでしょうか。これは「自己統一の欠如」であって、一貫した生き方ができない「人間の弱さ」を表しています。そのような自分に気づくとき、人は惨めになる。ペテロのように、自信に満ちた信仰告白をしながら、敵地では恐れに取り憑かれて告白した通りに生きられなかった例もあります。目覚めているときは柔和な人が、夢では殺人鬼のような心を持つ自分と出会うこともあるでしょう。例を挙げればきりがありませんが、人間にはどこか「統一を欠く」部分があるのです。これを「惨めさ」「悲惨」と呼ぶことにいたします。

今日はローマ 7:14-25 のパウロの言葉を併せて読んでいただきました。なぜなら、パウロ自身がこの箇所の中で、彼が抱える「統一の欠如」の問題に苦しんでいるからです。

わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。(7:15)

パウロはキリスト者となり、自分の中に潜む「統一の欠如」に目が開かれました。具体的に、彼のどのような部分を指して言っているのかは分かりませんが、彼は「こう生きなくてはならない」「こう生きたい」と願いながら、実際にはそれと程遠い状態にある自分に気づいたのです。おそらく、外面的な行動のうえでは、彼は非の打ち所のない生き方をしていたでしょう。しかし、心の思いがそれに伴っていない自分を認めないわけにはいかなかった。

このことをもう少し分かりやすくお話しします。私たちは誰かに対して怒りを燃やすことがあると思います。二度と会いたくないという感情にさえ囚われる。あるいは、憎しみが強いとき、殺してやりたいと思うことさえあるでしょう。しかし、私たちはその思いをあまり公には表しません。その相手と顔を合わせざるを得ないときは、どうにか平静を装っていることが多い。本当はその相手を許せたら楽になるのですが、それが難しいのです。表面上は許しているように、あるいは気にしていないように振る舞っている。しかし、実際にはそれができていない。こういうところで人間は煩悶苦悶はんもんくどうするのです。

では、私たちの心を苦しめているものとは何でしょう。それは、「神の律法である」とパウロは言います。

もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる。(7:16)

神の律法は、人間の真に正しい生き方を教えています。「人はこのように生きれば幸せになれるよ」という道が示されている。十戒では、人と人との関係（第5～10戒）において、両親を敬え、殺すな、姦淫するな、盗むな、嘘をつくな、人のものを欲しがると言われています。それらが正しい生き方であるということは、ほとんどの人が理解できるでしょう。表向きはそのように生きてきたかもしれない。しかし、その律法の本質——心においてさえ正しくあるように——と言われると（主イエスはそのように教えられたわけですが）、それが

できない自分を知るようになるのです。「殺すな」という教えは、「心の中でさえ怒りを燃やすな」という意味だと言われる。「姦淫するな」とは、「情欲をもって異性を見るな」という意味だと教えられる。この神の基準の高さを知るときに、それとは程遠いところにいる自分に気づくのです。

パウロという人は、キリスト者となる前から律法を知り尽くしていたという、異例の経歴を持つ人物です。パリサイ人として誰よりもその道を極め、厳格に守って生きようとしていた。表向きは責められるところがないほどであった。

当団体の顧問をしてくださっている櫻井先生と話しておりますと、法律の一字一句に精通し、それを正しく解釈し、それに則って生きておられることを知り、舌を巻いてばかりです。しかし、その先生の口から、「今のままでは不十分だ」という言葉が聞かれるとき、どういうレベルのことをおっしゃっているのだろうと考えさせられます。同じ法律家であるパウロの言っていることと通ずるものを感じるのです。彼は、イエス・キリストの福音に出会ってから、それまでの正しい生き方をもってしても、神の基準からは遠く離れている自分を見出すようになったのでしょ

そこで、この事をしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。もし、欲しないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。そこで、善をしようとするわたしに、悪がはいり込んでいてという法則があるのを見る。すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいて、わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。

(7:17-24)

パウロは、神の基準を知れば知るほど、それに逆らおうとするもう一人の自分があることに気づいたのです。

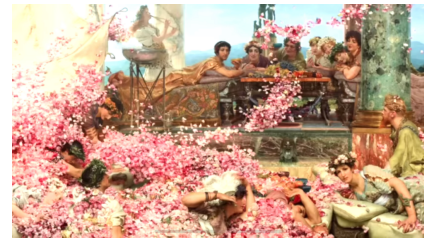
子どもにも当てはまると思いますが、例えば、ほとんどの親は子どもに対して、ゲームやYouTube、あるいはSNSの時間を制限するでしょう。それは、子どもの脳の発達を考えたことであつたり、幼いうちから電子媒体に依存していくことを避けるためであつたり、トラブルから守るためであつたりと、基本的に子どものためを思って言っているはずですが、子どもも、親と一緒に決めた決まり事に従うのは正しいということを大体は理解しているはずですが、しかし、自分の内側には、もっともっと娯楽にのめり込みたい、そういう願望がある。

これはもちろん大人にも言えることで、目を向けるべきではない世の誘惑についつい目が行ってしまつたり、一時の欲望に負けて罪を犯してしまうという形で現れているのではないのでしょうか。そのようなとき、何か本来あるべき場所から転落していくような感覚を私

私たちは覚えるのです。パウロは、これを「悪がはいり込んでいるという法則」だと言います。人間が生まれつき持っている「原罪」が、そのようにさせるのです。

そこで、ある人は言うでしょう。そんな罪意識に苦しむのであれば、そもそも基準など持たなければよいと。確かに、基準がなければ罪に定めるもの自体が存在しないということになります。ですが、絶対的な基準を欠いた世界があらゆる破壊をもたらしてきたことは、人類史が証明しているでしょう。神なしの世界が形成されるとき、人は、憎しみにも欲望にも歯止めがかからなくなるのです。

第一世紀のローマ皇帝を描いた有名な絵画があります。当時、人間がひたすら欲望の限りに生活していったらどうなるかという実験がなされた。絶大な権力を誇る皇帝たちは、欲しいものは何でも手に入れ、やりたいことは何でもやってみた。その結果、驚くべき行動を始めたと言います。ネロをはじめとする皇帝たちは、ある意味でアーティストで



あり、薔薇が大好きだったそうです。酒やデザートに加工までして、薔薇の香りを楽しんだと言います。23代皇帝、ヘリオガバレスが当時の酒宴の様子を絵画に描いた。皇帝は酒宴の席で何人もの女性をはべらせ、天井に張った幕に何トンもの薔薇を仕込み、宴会中に幕を切り、落とした薔薇で客人が窒息死するのを笑って眺めている。薔薇の美しさとは裏腹に、おぞましい人間の罪と歪んだ欲望がここに描かれています。人間は「心の法」を失ったとき、ここまで墮ちる可能性があることを示す一つの逸話であります。

私たちは、おそらくここまで欲望に身を任せる人生を歩むことはないと思いますので、理解しきれぬ面があるのですが、人間全般の内には根源的な「悲惨」が存在することは聖書が教える通りでしょう。神への慄きの欠如。すなわち、自分の内に潜む問題に気づかないことこそが、根本的な「悲惨」と呼ばれるのです。

「宗教の現実とは、人間が自分自身に戦慄することである。」(カール・バルト)

自分が病んでいて、本来あるべき「統一」が欠落しているという事実、聖書は気づかせようとしている。

私は嘘をつく自分に気づいて、愕然としたことがあります。若かった頃は無意味な見栄を張ることをやめられなかったのです。自分の実力以上のことを言ったり、知らないことを知っているかのように誤魔化したり。そういう偽りに気づいたとき、本当に惨めな自分を知りました。自分はどうしてこのようになってしまったのだろう、一体どうすればいいのだろう……と、焦りと不安で発狂しかけた時期がありました。そこに、今日のパウロの言葉が響いてきたのです。人が自分の惨めさに気づいたときにこそ、神の救いが介入すると。

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。(7:25a)

神は私たちに「惨めさ」を教えてくださいました。これは、聖書の御言葉を通してしか分かり得ないものです。そして、それが分かったとき、私たちは救いを求め始める。ところが、

救われて神の御心が分かってくると、ますます自分が深刻な「惨めさ」を抱えている存在であることを知るようになる。同時に、そこから救い出してくださった神の恵みの深さも知るようになるのです。これこそが、実は「救いの正のスパイラル」と呼ばれるものです。

【結論】

聖書がまず私たちに教えてくれるのは、「悲惨」「惨めさ」というものです。これは決して耳障りのいい事柄ではないかもしれません。自分の隠れた現実を突きつけられるからです。今まで見たこともなかった自分に気づかされるかもしれない。これは一面辛いことではありますが、まったく同時に幸いを身に受けることになる。悲惨が分かると救いが分かる。神の恵みが分かる。パウロの苦悶は、彼が如何に自分の問題の深さを知っていたかを表しており、同時に彼がどれほど神の恵みの大きさを知っていたかをも描いています。自分の心を深く掘れば掘るほど、そこに埋まっている恵みの宝をも見出していくのです。

【祈り】

完全なる統一体であられる天の父なる神様。あなたの内には分裂というものが存在しません。三位一体の神でありながら、一糸乱れぬ調和を有する方です。そのようなお方に造られたはずの私たちの内に、なぜか「統一の欠如」が存在します。そのことにさえ気づかずに歩んでおりました。しかし、聖書を通して、自分の真の姿が示されました。私たちはそれによって自分が何者であるかを知ったのです。それは、辛いことでもあり、幸いを受けることでもありました。なぜなら、そこに救いが並べられていたからです。救い主イエス・キリストのゆえに感謝いたします。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
万物を「善きもの」として創造し、ご自身の統一と栄光とを世に現し給うた、父なる神の愛、
惨めさを知り、自己の内なる「統一の欠如」に気づく者に、直ちに救いの御手を差し伸べ給う、主イエス・キリストの恵み、
救われた者の人格を修復し、キリストに似た者へと造り変え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。